

【趣意書】

前橋東照宮の拝殿解体・撤去工事の中止を求めます！

神社側は「令和の大改修」とし、文化財価値のある拝殿、門、塀垣の解体撤去を公表していません。しかし私たちの保全要請に対する回答で、解体・撤去が明らかになりました。責任役員と代表役員（瀬尾宮司）の独断で、氏子を含む関係者に説明と了承なく進められています。

私たちは「本殿と拝殿の一体的な保存」を強く希望します。嘉永6（1853）年に川越城内に建立、前橋城への移封に伴い移築し、以来、明治4（1871）年から前橋のシンボリックな建造物として今年で167年になります。昭和20（1945）年8月5日の前橋空襲で社務所は焼失、社殿は必死の消火活動で運よく焼失を免れました。戦前からの建物として市民の記憶に根ざしているため、この解体による損失は想像以上に影響が大きいと思います。

日光東照宮と同じ徳川家康公を祀る神社で、拝殿は入母屋造、神仏習合的意匠が見られる貴重なものです。建物には武州（現在の埼玉県）随一のケヤキなどの木材が使われ、細部も貴重で「本殿」の彫刻には江戸の名工・島村源蔵の目貫龍、「拝殿」には嫡男万吉の龍の彫り物があります。また金具では葵の釘隠しが見事ですし、基壇の石垣は旧前橋城を彷彿とさせます。すべてが歴史的な建物と一体化し、文化財として大きな価値を持っています。ですから公的な補助金を得て文化財として修復し保存することは十分可能です。あらゆる手法を以って保存することを強く要望します。解体は簡単ですが、保存は大変です。しかし非常に神経質な時代に、新政府に遠慮しながら「天神社」として守り通し、最後の城主「松平直克」が大切に残した東照宮を今日になって解体しては後世に顔向けできません。それではバチ当たりです。

旧前橋城内に唯一残る建物であり、震災ではなく「人災で」解体・撤去となれば全国的に見ても恥ずかしい行為です。境内には、萩原朔太郎と北原白秋ゆかりの「会見の杉」があり、これも伐採する計画です。朔太郎ファンにとって聖地のような場所の大杉を保全することを強く希望します。大正4（1915）年1月9日から1週間、白秋は前橋に滞在し、朔太郎は大歓迎して仲間とここに集まったのです。その時のようすが、前橋文学館朔太郎記念館前の橋のたもとに銅板写真のプレートとして掛けられています。

神社は宗教をこえて地域の守り神、「村の祭り」の鎮守様です。ですから周辺住民、氏子、前橋市民に十分計画を説明し、皆さんの理解を得た上で工事を進めるべきですが、強引に着工すれば、神社の将来が心配です。昔から「三人寄れば、文殊の知恵」とあるように、今からでも遅くないので貴重な文化財的建物を保存する方法を考えましょう。そのため、一旦、工事は中止して、どうしたら保存できるか知恵をしぼる話し合いをしましょう。

以上のような趣旨をご理解いただき、皆様のご署名とご協力を切にお願い申し上げます。
(令和2年11月吉日)

前橋東照宮の拝殿除却工事中止を求める連絡会

会長：松平直泰（松平大和守家第17代当主）

連絡会：幹事一同



写真1：参道と拝殿の正面



写真2：特徴的な屋根